2020_2_3 解説補足
2017_11_14 ヲシテ追加
2014_7_14～11_3 付

ホツマツタヱ講座

ホツマツタヱ　1アヤ(綾)　解説文

ホツマツタヱ研究家　吉田六雄

1アヤ(綾)【件名】

ヲシテ	カナ文字	現在訳
	ホツマツタヱミハタノハツ	ホツマツタヱ御旗の初
	キツノナトホムシサルアヤ	東西の名と穂虫去るアヤ(綾)

はじめに

(1)1アヤ(綾)が奉納された年代と、1アヤ(綾)の文節の考察

1アヤ(綾)の「東西の名と穂虫去るアヤ(綾)」が編纂された年代は、9アヤ(綾)以降と思われます。年代的には、25鈴(紀元前290年)以後のことと推測されます。

なぜ、このような推測が成り立つかと云いますと、それはワカ(和歌)姫の名前の変遷とアヤ(綾)の記述を見ると知ることができます。

(注 1)ヒルコ姫の基本的知識

ヒルコ姫は、長女として生まれたのです。だが、流されて、カナサキの子として育てられます。そして、時が経ってから、「天のイロト(妹)」して、再び、イサナミ、イサナギの子として召されるのですが、その時は、弟のアマテル神の妹として召され、その時の名は、ワカヒルメ(若昼女)と云い、ヒルコ姫の途中の名です。その後は、ヒルコ姫はアマテル神に仕え、和歌に優れた歌人の名の下照姫、その後、和歌に精進されて和歌の最高位の名のワカ(和歌)姫の名をアマテル神より賜われた。

振り返って、歴史書を年代の観点より見ますと、幼少より大人へと記述されるのが一般的かとおもいます。一転、ホツマツタヱを見ますと、全40アヤ(綾)の最初の1アヤ(綾)には、幼少の頃のヒルコ姫の名の記述は「0個所」です。それに対し成長されたワカ(和歌)姫の名が「6個所」です。次に2～8アヤ(綾)を見ますと、幼少の頃のヒルコ姫、下照姫のみが記述され、大人のワカ(和歌)姫の名は「0個所」です。次の9アヤ(綾)では、大人になったヒルコ姫が、ワカ(和歌)姫として記述されておりました。

更に、1アヤ(綾)には、ヒルコ姫より遅く生まれた、弟のワカヒト(オン神)の食事と年齢や末の弟のハナキネが、ワカ(和歌)姫から和歌を教えてもらう場面が記述されております。この時代錯誤の記述から見ても、1アヤ(綾)は、明らかに9アヤ(綾)の後に、1アヤ(綾)が書かれ、挿入されたことが容易に推定されます。詳細は、ヒルコ姫、ワカ(和歌)姫の記述のアヤ(綾)をご覧下さい。

抜粋　アヤ(綾)毎のヒルコ姫とワカ(和歌)姫の記述

	ヒルコ姫、下照姫	ワカ(和歌)姫
1アヤ(綾)の記述	なし	・1アヤ(綾)1・・それ和歌　ワカ(和歌)姫の神 ・1アヤ(綾)7・・ワカ(和歌)姫聡く ・1アヤ(綾)17・・扇ぐワカ(和歌)姫 ・1アヤ(綾)22・・ワカ(和歌)姫の　心を留む ・1アヤ(綾)24・・ワカ(和歌)姫の　和歌の歌　詠み ・1アヤ(綾)29・・ワカ(和歌)姫の　歌も雅お ・1アヤ(綾)30・・ヤスカワの　下照姫と
2～8アヤ(綾)の記述	・3アヤ(綾)4・・・妊みて生める名はヒルコ ・3アヤ(綾)19・・汚ゑ隈に拾つ　ヒルコ姫　今慈しに 足り至り　天の妹と　ワカヒルメ	・なし
	・・・・・・・・・21鈴125枝・・・・・・・・・・・・・・・・	
	・5アヤ(綾)8・・・ヒルコ姫　再び、召される	・なし
	・・・・・・・・・22鈴125枝、505枝・・・・・・・・	
	・6アヤ(綾)31・・いまだヒルコと　三熊野の ・6アヤ(綾)35・・ヒルコ姫　皇子オシヒトを　養育 します ・6アヤ(綾)35・・下照姫と　アチヒコと　伊勢お結びて	・なし
9アヤ(綾)の記述	・なし	・9アヤ(綾)24・・六弦琴　賜ふワカ(和歌)姫 ・9アヤ(綾)41・・これお問ふ　下照姫の　教え種(クサ) ・9アヤ(綾)43・・下照姫は　二青女　召して楽しむ ・9アヤ(綾)46・・後にワカ(和歌)姫　日足る時 ・9アヤ(綾)48・・オクラ姫(ヒルコでない)　授けて名おも 下照姫と
	・・・・・・・・・25鈴93枝・・・・・・・・	

(2)「東西の名と穂虫去るアヤ(綾)」が、なぜ、編纂され　1アヤ(綾)に挿入されたか

筆者は、更に、9アヤ(綾)の記述内容から判断し、2代モノヌシのクシヒコ、および、3代モノヌシのミホヒコが、ツルギ(剣)の臣の職として、2アヤ(綾)の前に、後に、1アヤ(綾)の「東西の名と穂虫去るアヤ」を挿入したのではないかと推定しております。その根拠としては、モノヌシ家の祖先になるハナキネ(ソサノオ)、ハナキネの長男であるクシキネ(オオナムチ)の頃の当時のできごとの記述が、2～9アヤ(綾)に多く記述されていることからもわかるようです。

もう少し具体的にお話しますと、クシヒコ、ミホヒコの祖先は、ワカヒト（アマテル神）の弟のハナキネ（ソサノオ）であり、祖父クシキネは初代モノヌシです。況して、2～5アヤ（綾）においても、アマテル神の御前の神議りの問答においても、クシキネは、禊ぎ典、神の教ゑなどを学ばれたようであり、この記録が、モノヌシ家に代代に渡って、多く残されていたことが容易に推測されるようです。

またクシヒコの子の3代モノヌシのミホヒコ（コモリ）は、更に、ツルギ（剣）の臣としてニニキネ、ホホデミの二人のアマキミ（天君）に仕え、家系的にアマテル神からの「君臣の道」に精進し、アマカミ（天神）、アマキミ（天君）の世を.継承させることに尽力したことからも容易に推定できるようです。

このような背景より、クニトコタチから始まったアマカミ（天神）の世をワカヒト（アマテル神）、オシヒト、ニニキネが継承し、天成る道の記録として多くの古の資料をモノヌシ家が保存していたと思われます。その中に、ワカ（和歌）姫の半生を綴ったアヤ（綾）や、オヲン神などの資料があり、ミホヒコは「東西の名と穂虫去るアヤ（綾）」を編纂し、六代モノヌシのワニヒコ（クシミカタマ）が、2アヤ（綾）の前に、1アヤ（綾）に挿入したと推定されるようです。

なお、1 アヤ（綾）が、2アヤ（綾）の前に挿入された経緯を、筆者の独断で説明しましたが、1 アヤ（綾）に記述される『ワカ（和歌）姫の半生を通じた天成る道』については、次の記事をご覧下さい。

ワカ（和歌）姫の半生を通じた「天成る道」の記事

（1）ワカ（和歌）姫【ヒルコ姫】の乗船、流し捨ての行事
（2）ホツマの八行事と江戸時代以降の五節句との対比
（3）アワ歌を教ゑて言葉の整え（共通化）
（4）ワカ（和歌）姫、カナサキより、「キツサネ」の由緒を学ぶ
（5）オン神の食事の回数と寿命（年齢）
（6）東西南北の意味を辿る
（7）稲虫払いと和歌の呪いの歌
（8）ワカ（和歌）姫とアチヒコの慣れ染めと夫婦の儀
（9）ハナキネ、姉（ワカ姫）より敷島の和歌の道を学ぶ

ホツマツタヱ本文　解説

1アヤ(綾)1(3～4 行)～2(2 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
		ソレワカハ	ワカヒメノカミ	それ和歌は	ワカ姫の神
		ステラレテ	ヒロタトソダツ	捨てられて	拾たと育つ
		カナサキノ	ツマノチオヱテ	カナサキの	妻の乳を得て
		アワウワヤ	テフチシホノメ	あわうわや	手ふちしほの目

(注 2)ワカ(和歌)姫の神の基本的知識

ワカ(和歌)のイミ名は、ヒルコ姫と云いますが、その後、ワカ(和歌)姫の神になられるまでのお話を先に述べておきたいと思います。ヒルコ姫は、イサナギ、イサナミの皇女子として生まれられたため、カナサキに拾われて育てられている間も、カナサキより和歌を学ばれ、また聡明であったため、アチヒコと夫婦となった時も、回り歌をアチヒコに送るなど、若くして和歌に長じられていた。そのため、早くから歌人の称号である下照姫を頂かれた。

また、時を経たスス暦の25鈴93枝(紀元前290年)頃の9アヤ(綾)23(4 行)～24(4 行)には、『そのヒルコ姫の下照姫が、「高天のオヲン神の前にて、六弦琴を討ち鳴らし和歌の歌を詠んだ」記述があり、この記述より、和歌の歌詠みが上手かったため、オヲン神より「ワカ(和歌)姫の名を賜わった」』ことが容易に推測され、その後の下照姫は、ワカ(和歌)姫と称えられるようになった。また神上がり時には、オヲン神より「ワカ(和歌)姫の神」を賜わったようであり、その偉業の大きさは、1アヤ(綾)1(3 行)にも「それ和歌は　ワカ(和歌)姫の神」と詠まれたことからも知ることができるようです。現在では、その和歌も長歌、短歌などに区分されておりますが、和歌の名はワカ(和歌)姫に由来していたのでした。

9アヤ(綾)23(4 行)～24(4 行)より引用すると、

高天には　　弓弦打ち鳴らし
ウスメミの　　奏でるお見て
オヲン神　　桑もて作る
六弦琴　　賜ふワカ(和歌)姫
六弦に弾く

語句の解説

・和歌→長・短歌などの総称、・ワカ姫→イサナギの初子・ヒルコ姫、・あわうわや→喜びを表すさま
・カナサキ→住吉神社の祭神、また、出処はホツマツタヱの読み下しより筑紫(福岡県宗像市)の鐘崎町(鐘崎港)が有力。

原文の現在訳

それ和歌は　ワカ姫の神　捨てられて　拾たと育つ　カナサキの　妻の乳を得て　あわうわや　手ふちしほの目

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

神話、上代のアマカミ（天神）の時代、君、皇子は幼い頃からツヅ歌、サツサ・ツヅ歌、アヒツの歌、ヤカタの歌、ケリの歌などの和歌を嗜まれ、これが君、臣の素養を身に付ける教育方法であった。その甲斐があり、歌に秀でて歌人となられたヒルコ姫は、下照姫を賜われた。その後、更に研鑽されて、オヲン神より和歌の歌人の最高位である「ワカ（和歌）姫の神」の称え名を賜われた。それがため、和歌と云えは　ワカ（和歌）姫の神を指すようになりました。その頃のワカ（和歌）姫は、約40歳～約45歳であったろうと思われます。

このように栄華を極めたワカ（和歌）姫の神ですが、1アヤ（綾）では、その栄華と対比するように、次の文章より、ワカ（和歌）姫、ヒルコ姫が、如何に幼い時に波乱万丈なスタートであったかを記述しておりました。

ワカ（和歌）姫の神、ヒルコ姫であるが、生まれられた頃、父母の天の節（厄年）に遭遇し、波乱万丈のスタートがきられた。ヒルコ姫の誕生は、スス暦の21鈴（紀元前330年）以前になります。イサナギ、イサナミの初子として生まれたヒルコ姫であるが、3アヤ（綾）4（1行）～5（4行）より引用すると、その年、父と母は、スズ40穂、31穂の天の節（厄年）に当たっていた。

そのため、父の穢れを払うため、僅か3歳になる前に、「磐楠船に　乗せ捨つる」の厄払いの行事で、川に捨てられて流されました。下流で待っていたカナサキの翁に　拾われて、幼い頃を翁の娘として拾たと育つことになります。

カナサキの邸宅の西殿は、子育ての屋形になります。帰りを待っていたカナサキの妻は、ヒルコ姫を抱き上げて　優しく乳を上げられた。ヒルコ姫は、カナサキの妻の乳を得て、気分も優れてあわうわやと喜ばれて、手ふちされたり、目をしほの目にされて悦ばれた。

1アヤ（綾）2（3行）～3（3行）【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
		ウマレヒハ	カシミケソナエ	生まれ日は	カシ御食供え
		タチマヒヤ	ミフユカミオキ	立ち舞ひや	三冬髪置き
		ハツヒモチ	アワノウヤマヒ	初日餅	天地の敬い
		モモニヒナ	アヤメニチマキ	桃に雛	菖蒲に粽
		タナハタヤ	キククリイワヒ	七夕や	菊栗祝ひ

語句の解説

・カシ→かしき（炊き）、飯をたくこと、・御食→神への供物・天皇の食事の料、

・カシミケ→ご飯を炊いて神に供える、・立ち舞ふ→立って舞うこと。その舞、

・ミフユ→.みふゆ【三冬】冬の 3 か月（陰暦 10、11、12 月）、

・桃に雛→雛祭りは、シナにはない行事

（注 3）ホツマツタヱ当時の八行事とシナ（支那）伝来の五節句の基本的な知識

ホツマの行事とシナ（支那）より伝来した行事と相まって、江戸時代に幕府の公的な行事・祝日と定められた云います。

ホツマツタヱ	漢名	日付	和名	節句料理
生まれ日は　炊御食供え				
立ち舞や				
三冬髪置き				
初日餅　天地の敬ひ	人日	1月7日	七草の節句	七草粥
桃に雛	上巳	3月3日	桃の節句・雛祭	菱餅や白酒など
アヤメに粽	端午	5月5日	菖蒲の節句	菖蒲酒、柏餅、粽、菖蒲湯
七夕	七夕	7月7日	七夕	裁縫の上達を願い素麺が食される
菊栗祝ひ	重陽	9月9日	菊の節句	菊を浮かべた酒など

【疑問】

アマテル神が岩屋にお隠れになった頃の記述として、チマキを作ったとの記述があります。この時の稲作は、陸稲だったか、水稲だったか。

【疑問に応える】

1アヤ（綾）には、「アヤメにチマキ」との文章があります。それぞれ調査しますと、「アヤメは乾燥地に適している。」とのことでした。また、類似の花に菖蒲（ショウブ）がありますが、「菖蒲やカキツバタは、湿地に適している」とのことでした。このことより、「アヤメとチマキ」は、同じ場所に植えられていたと考えますと、アヤメが乾燥地であるところから、この頃の稲作は陸稲であったことになります。当然、チマキは陸稲米より作られたチマキであったかと思われます。

原文の現在訳

生まれ日は　カシ御食供え　立ち舞ひや　三冬髪置き　初日餅　天地の敬い　桃に雛　菖蒲に粽　七夕や　菊栗祝ひ

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

また、カナサキの翁の家ではイサナギ、イサナミに変わり、実の親のようにヒルコ姫の成長に合せて、(1)生まれ日は　炊御食供え、(2)立ち舞や、(3)三冬髪置き、(4)初日餅　天地の敬ひ、(5)桃に雛、(6)アヤメに粽、(7)七夕および、(8)菊栗祝ひの行事(節句)が行われました。

1アヤ(綾)3(4 行)～4(1 行)【本文】

ヲシテ	カナ文字	現在訳	
𓄿𓄿𓄿𓄿𓄿 𓄿𓄿𓄿𓄿𓄿𓄿𓄿	ヰトシフユ　オハハカマキル	五歳冬	男は袴着る
𓄿𓄿𓄿𓄿𓄿	メハカツキ		女は被衣

語句の解説

・袴→和装で着物の上から着けて腰から脚をおおうゆったりした衣服。上部に付けたひもを結んで着用し，普通，ズボンのように両脚の部分に分かれるが，スカート状のものもある。古くは男子のみが用い，埴輪(はにわ)に原初的な形態が見られる。

・被衣→本来は「かづき」と云う、女子が外出に頭に被(かづ)く(かぶる)衣服のこと。現「かつぎ」と云う。

原文の現在訳

五歳冬　男は袴着る　女は被衣

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

また、五歳の冬(11 月)になりますと、男の子は袴着る祝いの行事がなされていたとのことです。この五歳の記述は、神武天皇の幼少の27アヤ(綾)80(4 行)～81(2 行)の記述より引用しますと、「タネコは皇子の　大御守　皇子タケヒトは　年五つ)」と記述されており、アマテル神の頃も神武天皇の頃も五歳は男の節目であったことが確認されるようです。

また、女の子は、外出に頭に被(かづ)く衣服を着て、お祝いしたようです。だが、「女は被衣」時の年齢が、ホツマツタヱに年齢の記述がなく不明です。

(注 4)七五三のお祝いの基本的な知識

明治神宮のHPを引用しますと、「A：当初は三歳は女子、五歳は男子のお祝いだけで七歳のお祝いはなかったのが、七五三の数をそろえるため、江戸時代になってから七歳を女の物日(ものび・祭日・祝祭日など特別な事の行われる日)として、女子は三歳と七歳の2回やることになった」とのことです。このことから判断しますと江戸時代以前には、「七歳のお祝いはなかった」と推測されます。そうしますと、ホツマツタヱの(3)「女は被衣」の記述は、(2)「五歳冬　男は袴着る」と同じ五歳冬であったことが、云えるようです。

1アヤ(綾)4(1 行)～5(2 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
		コトバオナオス		言葉お直す	
		アワウタオ	ツネニオシヱテ	天地歌お	常に教えて
		アカハナマ	イキヒニミウク	アカハナマ	イキヒニミウク
		フヌムエケ	ヘネメオコホノ	フヌムエケ	ヘネメオコホノ
		モトロソヨ	ヲテレセヱツル	モトロソヨ	ヲテレセヱツル
		スユンチリ	シヰタラサヤワ	スユンチリ	シヰタラサヤワ

語句の解説

・アワ(天地)の歌→イロハ歌と同様に、日本語の基本の48音の歌で、神代は「ア」音で始まり、「ワ」で終わる48音の歌を云う。

原文の現在訳

言葉お直す　天地歌お　常に教えて　アカハナマ　イキヒニミウク　フヌムエケ　ヘネメオコホノ　モトロソヨ　ヲテレセヱツル　スユンチリ　シヰタラサヤワ

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

五歳になられたヒルコ姫は、賢く、英知に飛んだ女の子でした。またこの年に「女は被衣」の行事も済まされ、同時に、正しい日本語が喋れるように言葉を直す、皇女子の教育を受けられることになりました。アワ(天地)歌のヒルコ姫への教育は、カナサキの翁が担当され、その教育方法は、アワ(天地)歌お　常に教えてと、日常の中で言葉の指導がなされたのでした。そのアワ(天地)歌を朗読しますと、「アカハナマ　イキヒニミウク　フヌムエケ　ヘネメオコホノ　モトロソヨ　ヲテレセヱツル　スユンチリ　シヰタラサヤワ」になります。

1アヤ(綾)5(3 行)～7(2 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
		アワノウタ	カダガキウチテ	天地の歌	かだかき打ちて
		ヒキウタウ	オノツトコヱモ	弾き歌う	自つと声も
		アキラカニ	ヰクラムワタオ	明らかに	ヰクラムワタお
		ネコヱワケ	フソヨニカヨヒ	音声別け	二十四に通ひ
		ヨソヤコヱ	コレミノウチノ	四十八声	これ身の内の
		メク リヨク	ヤマヒアラネハ	巡り良く	病あらねば
		ナカラエリ	スミヱノオキナ	長らえり	住吉の翁
		コレオシル		これお知る	

語句の解説

・かだかき→古代の楽器、・うち→動詞に付いてその動作・作用を強めたり語調を整えたりする。、
・ひき→弾き→はじくこと、・オノツト→自つと→ひとりでに、・住吉→カナサキ(金折)のこと、
・明らか→光が満ちて、明るく物を照らしているさま。、・ヰクラムワタ→五臓六腑、・知る→気づく、
・音声→人間の発する声、・身の内→からだの内部・体中、・巡り→順にまわること、

原文の現在訳

天地の歌　かだかき打ちて　弾き歌う　自つと声も　明らかに　ヰクラムワタお　音声別け　二十四に通ひ　四十八声　これ身の内の　巡り良く　病あらねば　長らえり　住吉の翁　これお知る

解説文　　(赤文字は、原文の現在訳です。)

イサナギ、イサナミの両神は民の言葉がふつ曇りするのを心配されて、天地の歌を作られ、9アヤ(綾)25(1 行～4 行)より引用しますと、イサナギ自身が作られた三筋のかだかき打ちて　弾き歌うことをお奨めになられた。この天地の歌を歌うことにより、歌人の両神自身も自つと(ひとりでに)声も　明らか(光が満ちて、明るく物を照らしているさま)に　ヰクラ(五臓)ムワタ(六腑)お　音声(人間の発する声)を聞き別け　上句の二十四に通ひ　上下句の四十八声を歌い連ねられると、両神自身のこれ身の内の血の巡りも良くなられたようです。当然、病あらねば心配することもなく、この甲斐があって、両神も長らえりされました。またヒルコ姫を養育された住吉の翁自身も血の巡りが良くなるのを体験されており、これお知ると云われていました。

9アヤ(綾)25(1 行～4 行)より引用すると、
その琴の音は　イサナギの　垣の葛打つ　糸薄　これ三筋の　琴の音ぞ

1アヤ(綾)7(2 行)～9(2 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
			ワカヒメサトク		ワカ姫聡く
		カナサキニ	キツサネノナノ	カナサキに	東西南北の名の
		ユヱオコフ	オキナノイワク	故お請ふ	翁の曰く
		ヒノイヅル	カシラハヒカシ	日の出る	頭は東
		タケノボル	ミナミルミナミ	たけ昇る	みな見る南
		ヒノオツル	ニシハニシスム	日の落つる	西は丹沈む
		ヨネトミヅ	カマニカシクハ	米と水	釜に炊くは
		ヒカシラヤ	ニヱハナミナミ	火頭や	煮え花南
		ニヱシツム		煮え静む	

語句の解説

・「キ、ツ、サ、ネ」→一音節・キ「東」ツ「西」サ「南」ネ「北」、・イヅ→出づ、・たけ昇る→長上・闌上、
・長上・闌上→知力・才能などが人に長じ高い程度に至る、・丹→黄色みを帯びた赤色の太陽
・ヨネ(米)→イネ、ゾロのこと、釜→飯を炊いたり、湯を沸かすのに用いる陶製又は金属製の容器鉄の伝来→紀元前 331～330 年頃、煮え花→煎じたばかりの香味の米茶

原文の現在訳

ワカ姫聡く　カナサキに　東西南北の名の　故お請ふ　翁の曰く　日の出る　頭は東　たけ昇る　みな見る南　日の落つる　西は丹沈む　米と水　釜に炊くは　火頭や　煮え花南　煮え静む

解説文　　（赤文字は、原文の現在訳です。）

ワカ姫(幼い時の話であり、この頃はヒルコ姫と云う)は、イサナギ、イサナミの長女として生まれ、また、生まれた時より聡く(物わかりがよい)、イサナギの左臣のカナサキ(翁)に　1音節の　キ(東)、ツ(西)、サ(南)、ネ(北)の名の故(わけ)お請ふ(願い求める)のでした。

だが、次にカナサキの翁がヒルコ姫へ説明された方角の言葉は、キ(東)、ツ(西)、サ(南)、ネ(北)などの一音語の説明でなく、2～3音節の言葉のヒガシ(東)、ニシ(西)、ミナミ(南)、キタ(北)であった。このことは、すでにヒルコ姫、カナサキの翁の当時においても、全ての方角の言葉は、2～3音節のヒガシ(東)、ニシ(西)、ミナミ(南)、キタ(北)に定着していたことが推定され、そのため、前述のカナサキの翁の2～3音節の説明に繋がっていたと推測されます。また、その後の説明においても、太陽の一日の動き、ご飯の炊き方、人の営み、人の出会い、季節の変化などの例題に置き換えて、ヒルコ姫にわかり易いように説明されていたことになります。

太陽の一日の動きより東南西の方角の説明

カナサキの翁の曰く(言うことには)、東とは、日の出る　頭は東より→ヒ、カシラ→ヒカシ(東)と云い、南とは、たけ昇る　みな見る南より→ミナミル→ミナミ(南)と云う。また西とは、日の落つる　西は丹沈むより→ニシスム→ニシ(西)と云うと、ヒルコ姫に教えられた。

炊飯の仕方より東南西の方角の説明

更に、カナサキの翁の曰く(言うことには)。米と水を釜に入れてご飯を炊く方法ですが、まずお米を水で研ぎ、次に釜の米に対し水を適量入れて火をつけます。初めは、火頭やから東から太陽が上がるように炊き始め、お米の炊ける煮え花の匂いがする頃は、釜のご飯が高温となり蒸気がでており、太陽の位置する方角で云えば南になります。そこから、火を弱めてご飯(米)の芯が煮えるまで、蒸らし、ご飯が炊き上がり静むことで出来上がります。なお、驚くことは、この頃に陶器、釜などの食器によりご飯が炊かれていたことです。

1アヤ(綾)9(2 行)～11(1 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
			ヱカヒトタビノ		ヱ神、一度の
		ミケハコレ	フルトシフヨリ	御食はこれ	古年二より
		ツキミケノ	ヒトハモヨロニ	月三食の	人は百万に
		ツキムケノ	ヒトハフソヨロ	月六食の	人は二十万
		イマノヨハ	タダフヨロトシ	今の世は	ただ二万歳
		イキナルル	ミケカサナレバ	生き慣れる	御食重なれば
		ヨワヒナシ	ユエニオンカミ	齢なし	故に大神
		ツキニミケ	ニガキハホナヤ	月に三食	苦きハホナや

語句の解説

・ヱカ→「ミカサ」に「ヱカミ(神)」あり、・二より→スス暦では二穂か、・大神→大神は三食、御歳は百七十万歳、・ハホナ→大神の常食とされていた菜

【疑問_1】

「ヱカ」とは、どんな意味か？

【疑問に応える_1】

「ヱカ」とは、ヱカミ(ヱ神)のことであった。その根拠は、ミカサフミ　ナメコトのアヤ(綾)に記述されており、「　天御祖神　祝(のり)してヱカミ(ヱ神)　冬お守り」の一文に記述されておりまように、「ヱカ」の本来の文章は、ヱカミ→ヱ神→ヱトの神→兄のヱ神のことを「ヱカ」と短縮していると判断されます。

【疑問_2】

人は百万(歳)、人は二十万(歳)の時は、食事の回数が、月三食、月六食と記述されておりますが、「今の世は　ただ二万歳」の時の食事の回数が未記述です。本当に不明でしょうか。

【疑問に応える_2】

「月三食の　人は百万(歳)に　月六食の　人は二十万(歳)」の関係より、「今の世は　ただ二万歳」の時の食事回数を計算しますと、今の世の食事回数は、月24食に計算されるようです。このことは約10日に8日は食事(米食)が取れていたことが考えられます。

今の世はただ二万歳の食事回数(例)	←	人は二十万(歳)の食事回数(例)
(式)今の世の食事を求める再現式		(式)月六食の再現式
＝月6食×(20万÷2万)×(6．4÷16)		＝月3食×(100万÷20万)×(6．4÷16)
＝月6食×10倍×0．4倍		＝月3食×5倍×0．4倍
＝月24食		＝月6食

但し、上式の(6．4÷16)は、再現式の定数とする。

原文の現在訳

ヱ神、一度の　御食はこれ　古年二より　月三食の　人は百万に　月六食の　人は二十万　今の世はただ二万歳　生き慣れる　御食重なれば　齢なし　故に大神　月に三食　苦きハホナや

解説文　　（赤文字は、原文の現在訳です。）

ヱトの神の兄神になるヱ神は一度の御食事をされましたが、この時の御食事は、これが初めてのゾロ（米）の米食でした。そして、稲作は、古年（スス暦）のヱトの二た周りより始まり、その年の秋より、一と月に三食のゾロ（米）が食べられるように実ったとのことです。

その甲斐があって、人は長生きして百万（穂）に神上がりするまでになって来ました。その後、稲作りも順調に行き、ゾロ（米）の収穫も増え始め、一と月に六食のゾロ（米）が食べられるようになって来ますと、反対に、人々は早枯れするようになり二十万（穂）まで長生きするのが、やっとになって来ました。

そして、今の世は稲作りも陸稲と水稲の二種類の作付になり、稲の収穫も一段と増加して、一と月の米食の回数も、約24食（約10日に8食）になってきました。だが、人の寿命は一層早枯れし、ただの二万歳まで生き慣れる時代になっておりました。このように千代見草を食べる機会が減少し、米の御食が重なるようになれば二万歳も生きなくなり、齢もなしになることは自明の世になってきました。

その点、アマテル神は、昔ながらに一と月に三食の米食を守られて、他は千代見草を多く食べられる生活をされておりました。故に大神の食事に関して、皆との間には、一と月に三食の米食が共有の認識になっておりました。

そして、月に三食の米食以外は、大神の常食であった苦きハホナや山菜を食べられました。この甲斐があって、アマテル神は28アヤ（綾）36のように「苦きを食みて　百七十三万　二千五百年」以上も長生きされたのでした。

（注_5）太陽暦でのアマテル神の年齢

アマテル神の年齢をホツマツタヱの記述より詳細に調査して見ました。その結果、スス暦の暦法より太陽暦に変換し、アマテル神の年齢を算出して見ますと、約82歳～85歳（西暦換算）まで長生きされていたことがわかってきました。

（なお、この原稿は、件名「天の真名井で　元の日の輪に帰られたアマテル神　その生涯の年齢の考察」として、ホームページで公開中です。）

1アヤ(綾)11(2 行)～13(2 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
		ミナミムキ	アサキオウケテ	南向き	朝気お受けて
		ナガイキノ	ミヤノウシロオ	長生きの	宮の後ろ
		キタトイフ	ヨルハネルユヱ	北と云ふ	夜は寝る故
		キタハネゾ	モシヒトキタリ	北はネぞ	もし人来たり
		コトワケン	アワネバキタヨ	事別し	会わねば北よ
		アフハヒデ	ミナミニコトオ	会ふはヒデ	南に事お
		ワキマエテ	オチツクハニシ	わきまえて	落ち着くは西
		カエルキタ	ネヨリキタリテ	帰る北	ネより来りて
		ネニカエル		ネに帰る	

語句の解説

・南向き→南の方角に向いていること、・朝→夜が明けて間もない時。午前中、
・気→それが感じられる状態・気配、・受ける→受け止める、・長生き→長く生きる。長寿。長命、
・故→わけ、・寝る→寝床に入る、・ネ→北の一音語を「ネ」「寝」と云う、・分け、別け→分けること、
・会う→互いに顔を向かい合わせる、・ヒデ→日出(ヒデ)→太陽の上端が地平線上に現れること。
また、その時刻。ひので、・弁え→物事の違いを見分けること、
・落ち着く→動揺が静まり，安定した状態になる、・帰る→自分の家や、元居た場所に戻る。

原文の現在訳

南向き　朝気お受けて　長生きの　宮の後ろ　北と云ふ　夜は寝る故　北はネぞ　もし人来たり　事別し　会わねば北よ　会ふはヒデ　南に事お　わきまえて　落ち着くは西　帰る北　ネより来りて　ネに帰る

解説文　　（赤文字は、原文の現在訳です。）

26鈴17枝23穂(紀元前280年)の三月初日に、キヨヒト(ニニキネ)は宮造り法を定められるや、そのニハリ(新治)宮の中墨柱は、21アヤ(綾)5(1～4 行)より引用しますと、南向きと決められました。このようにして南向きに建てられた宮は、人の一日の生活の営みを表現するように、夜明けから午前中に目一杯の朝気お受けて、7アヤ(綾)59(1～2 行)より引用しますと、「清く朝日お　拝み受け　良き子生むなり」また、14アヤ(綾)27(1～2 行)より引用しますと、「朝日のウルお　身に受けて」と、邪気(病気を起こす悪い気)が入る余地を与えず、皆は長生きの恩恵を受けるようになりました。

その恩恵により、宮の後ろお　北と云ふようになりました。また古の寝室(または、病人の寝室)は、宮の中でも一年間を通じて、気温の変化が少ない北の方角と決められており、夜は寝る故　北はネ(1音節の北をネと云う)ぞと、カナサキの翁はヒルコ姫に説明されておりました。

人の出会いも方角で説明できると、カナサキの翁は続けてられました。もし人が貴方(ヒルコ姫)に会いたいと遠方より来たりされた時は、色々な理由で事別し、もしも　会わなかったらどうでしょうか。この場合会わねば北のように「心静か」で良いのですが寂しい限りです。貴女はヒルコ姫。イサナギのアマカミ(天神)の娘ですよ。器量を疑われます。また、喜んで会ふことになれば、互いに顔を向かい合うことは、日出、太陽の上端が地平線上に現れるようにヒデになります。

更に、お互いの健康、家族の健康を確かめて、旧知の間を取り持つことがで来れば、心が躍るよう高揚し、方角では南になります。その中でも良い事、悪い事お　わきまえて(物事の違いを見分けること)おられるようですので、カナサキの翁は安心しております。

そして、友と別れた後は、心を次弟に落ち着かせて下さい。落ち着く気持ちは西なります。そして、宮(家)に帰るは北になります。語呂合わせのように聞こえますが、ネ(北)より来りて　ネ(北)に帰る。このように、北を出発し、東、南、西と周って北に帰るように、方角の意味を説明されておりました。

1アヤ(綾)13(2 行)～15(3 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
			キハハルワカバ		木は春若葉
		ナツアオバ	アキニヱモミヂ	夏青葉	秋煮え紅葉
		フユオチバ	コレモオナシク	冬落ち葉	これも同じく
		ネハキタニ	キザスヒガシヤ	ネは北に	兆す東や
		サニサカヱ	ツハニシツクル	サに栄え	ツは西作る
		ヲハキ ミノ	クニヲサムレハ	ヲは君の	国治れは
		キツオサネ	ヨモトナカナリ	東西中南北	四方と中なり
		キハヒガシ	ハナハモミナミ	キは東	花葉も南
		コノミニシ	ミオワケオフル	木の実西	実も分けお篩
		キノミユエ	キミハオメカミ	木の実故	君は男女神

語句の解説

・若葉→生え出て間のない草木の葉、・青葉→緑色をした草木の葉。特に、若葉のころを過ぎて、青々と茂った木の葉、・紅葉→秋になって葉が紅色に変わること、

・落葉→散り落ちた木の葉。散ってゆく木の葉、・兆す→草木が芽を出す。芽生える、

・栄える→勢いが盛んになる。繁栄する。繁盛する、・作る→ある力を働かせて、新しい物事

・状態を生みだす。まとまった形のあるものにする、・ヲ→中央、

・治める→世の中や家の中を秩序ある状態にする。統治する、

・四方→四つの方角。東西南北の方角。周囲、

・フル→篩う→篩(ふるい)にかけてより分ける、木の実→キのミ→キミ→君

原文の現在訳

木は春若葉　夏青葉　秋煮え紅葉　冬落ち葉　これも同じく　ネは北に　兆す東や　サに栄え　ツは西作る　ヲは君の　国治れは　東西中南北　四方と中なり　キは東　花葉も南　木の実西　実も分けお飾　木の実故　君は男女神

解説文　　（赤文字は、原文の現在訳です。）

また東南西北を季節の変化でも説明できると、カナサキの翁は続けられました。冬の間に徐々に膨らんで春を待ち望んでいた木の芽は、春先に萌え出て芽となり、生え出て間のない淡い緑の若葉となります。夏には、青々と茂った深い緑色の青葉になり、秋には、煮え紅色の葉に変わります。冬になると散り落ちた木の葉になり、役目を終えます。これも今までの説明に同じく　ネ（寝る）は北に　兆す（草木が芽を出す）東や　サ（南）に栄ゑ（勢いが盛んになる）ツ（西）は西を作る（ある力を働かせて、新しい物事を生みだす。）ヲ（中央）は天神の君の住む天の原になり。天神の国を治むれ（世の中や家の中を秩序ある状態にする）る範囲は　東西中南北の　四つ方角の周りと中央の天の原になります。

要約しますと、草木が芽を出すキザスは東になり、春の花、夏の青葉も南にありて、木の実が成熟し陽が落ちるは西になります。　木のミ（実）も分けるようにお飾（フル）いにかけると、　木の実の本来の故（理由）は、君（木の実→キのミ→キミ→君）であり、君（君→木実→キミ→キ・ミ→男・女→男女）とは男神と女神の夫婦神のことだと説明されるのでした。

1アヤ（綾）15（4 行）～19（1 行）【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
		シカルノチ	イサワノミヤニ	然る後	伊雑の宮に
		ハベルトキ	キシヰノイナダ	はべる時	紀志井の稲田
		ホオムシニ	イタムオナゲキ	穂お虫に	痛むお歎き
		アルカタチ	ツグルイサワノ	ある状	告ぐる伊雑の
		オヲンカミ	アマノマナヰニ	大御神	天の真名井に
		ミユキアト	タミノナゲキニ	御幸あと	民の歎きに
		ムカツヒメ	イソギキシイニ	ムカツ姫	急ぎ紀志井に
		ユキヒラキ	タノキニタチテ	行き開き	田の東に立ちて
		オシクサニ	アフグワカヒメ	オシクサに	扇ふぐワカ姫
		ウタヨミテ	ハラヒタマエハ	歌詠みて	祓ひ賜えは
		ムシサルオ	ムカツヒメヨリ	虫去るお	ムカツ姫より
		コノウタオ	ミソメオマテニ	この歌お	三十女お左右に
		タタツマセ	オノオノトモニ	佇ませ	おのおの共に
		ウタハシム	イナムシハラフ	歌はしむ	稲虫払う

語句の解説

・然る後→そうしてから。そのあとで、・伊雑の宮→三重県志摩市に鎮座、
・はべる→かしこまってその席にいる、・キシイ→紀志井→紀井→紀伊、
・紀志井国→「橘植ゑて　常世里」、・穂お虫→稲を食べる虫(稲子、蝗)、
・告げる→言葉などで伝え知らせる、・大御神→「民の歎きに　ムカツ姫」とあり夫のワカヒトのこと、
・真名井→丹後半島の真名井の神社(候補地が 4～5 社あり)、・御幸→アマカミ(天神)の出掛け、
・ヒラキ→開き=啓き、・オシクサ(玄参)→植物「ごまのはぐさ(胡麻葉草)」の古名。和名は葉がゴマの葉に似ていることから、・祓う→神に祈って、罪やけがれ・災いなどを除き去る、
・賜え→恩恵をお授けください、与えてくださいの意を表す、
・佇む→しばらく立ち止まっている。じっとその場所にいる、・払う→除去する。脇へ追い退ける。

【疑問】

然る後の間の期間は、どのくらいの年月になりますか。？

【疑問に応える】

辞書訳を見るまでもないですが、「然る後」の訳は、「そうしてから。そのあとで。」と記しております。前節ではカナサキの翁が、「東西南北」の話を(1)太陽の一日の動き、(2)ご飯の炊き方、(3)人の営み、(4)人の出会い、(5)季節の変化、(6)天の原を中心に東南西北の周囲を天神の君が治めることなどを説明されておりました。

だが、次の行(4 行)～は、「然る後　伊雑の宮に　はべる時　紀志井の稲田　穂お虫に　痛む」と、三重県の伊雑の宮での稲虫と和歌の話に大きく場面が転換しております。この伊雑の宮は、アマテル神がハラミの宮より遷られた宮であり、ムカツ姫も登場することはアマテル神とムカツ姫が結婚された後の年代と云うことがわかってきます。

またヒルコ姫もワカ姫の名で登場しているため、9アヤ(綾)以降に書かれた内容と思われます。このような「然る後」の使用の仕方より見ても、1アヤ(綾)は、9アヤ(綾)以降に編纂、追加された内容だと云うことが濃厚になってくるようです。このことを考慮し年数を推定しますと、ヒルコ姫が「東西南北」の話をカサナキより聞いていた頃より、早くても約10年～約50年は経過しているだろうと思われます。

原文の現在訳

然る後　伊雑の宮に　はべる時　紀志井の稲田　穂お虫に　痛むお歎き　ある状　告ぐる伊雑の　大御神　天の真名井に　御幸あと　民の歎きに　ムカツ姫　急ぎ紀志井に　行き開き　田の東に立ちて　オシクサに　扇ふぐワカ姫　歌詠みて　祓ひ賜えは　虫去るお　ムカツ姫より　この歌お　三十女お左右に　佇ませ　おのおの共に　歌はしむ稲虫払う

解説文　　（赤文字は、原文の現在訳です。）

カナサキの翁がヒルコ姫に、東西南北の話をされてから、然る後（この間は、早くても約10年～約50年は経過していると考えらります。）のある日、アマテル神はいつものように伊雑の宮（三重県）にて、政務をされておりました。その側らでムカツ姫、ワカ姫は、はべられるなどして時を過ごしておられました。

そんな中に、紀志井の民が稲田の稲が、穂お虫（稲を食べる虫、稲子、蝗）に食べられて、稲穂が痛むお歎き大変だとのある状（実際のありさま）の連絡が、大御神（アマテル神）の元に告ぐる（言葉などで伝え知らせる）ことになりました。それをお聞きになった伊雑の宮の大御神（アマテル神）は、稲作の先進地である天の真名井に御幸され、稲虫の除去方法をお聞きになられたあと、同行したムカツ姫にご指示をされました。

天の真名井まで聞こえていた民の歎きにムカツ姫は、伊雑の宮に帰るの止められて、急ぎ紀志井に行き、開き（稲作の具合）を確認されたのであった。そして、ムカツ姫自ら田の東に立ちて、オシクサ（植物「ごまのはぐさ（胡麻葉草）」の古名）に扇ふぐことを施されました。またワカ姫は、歌を詠みて、祓ひ（神に祈ってけがれを清め、災厄を取り除くこと）賜え（恩恵をお授け下さい）られれは、虫は西の方向に飛び去るお確信されるのであった。

このことで、ムカツ姫よりワカ姫にご相談されて、ワカ姫が詠まれたこの歌お、三十女お田の東のワカ姫の左右に佇ませ（しばらく立ち止まる）られて、おのおの（めいめいの独唱）共（全員での合唱）に歌はしむことをされて、稲虫を祓う（脇へ追い退ける）　ワカの呪いの和歌を歌われたのでした。

1アヤ（綾）19（2 行）～21（4 行）【本文】

ヲシテ	カナ文字	現在訳
	ワカノマジナイ	ワカの呪い
	タネハタネ　ウムスギサカメ	種は田根　ウムスギサカメ
	マメスメラノゾロハモハメソ	マメスメラノゾロハモハメソ
	ムシモミナシム	虫も皆死む
	クリカエシ　ミモムソウタヒ	繰り返し　三百六十歌ひ
	トヨマセバ　ムシトビサリテ	トどよませば　飛び去りて
	ニシノウミ　ザラリムシサリ	西の海　ざらり虫去り
	ヱオハラヒ　ヤハリワカヤギ	穢お祓い　やはり若やぎ
	ヨミカエル　ゾロニミノリテ	甦る　ゾロに実りて
	ヌバタマノ　ヨノカテオウル	ぬばたまの　世の糧を得る
	オンタカラ　ヨロコビカエス	御宝　喜び返す

語句の解説

・ウムス(ギ)→畑を耕す(大辞)、サカメ→目をさかだてること、
・ウムスギサカメ→掘り上げた土を逆立て(裏返す)にして崩す、・マメス→まぶす(大辞典)、
・メラ→ども、たち、(ガキめら・マメスメラ→平らにまぶすこと、・どよませば→響き渡せば、
・西の海→1年中の災厄や諸悪を西の海へ流してしまうの意、
・ざらり→多数の稲虫の羽根が触合う音。ざらざら、・穢→けがらわし、きたなし、ゾロ→稲、
・若やぎ→若がえること、・甦る→蘇生する。・ぬばたま→檜扇の種子。黒くて球状をなす、
・世の糧→世の生活を豊にするもの、御宝→「宝」の丁寧語

原文の現在訳

ワカの呪い　種は田根　ウムスギサカメ　マメスメラノ　ゾロハモハメソ　虫も皆死む　繰り返し　三百六十歌ひ　トどよませば　飛び去りて　西の海　ざらり虫去り　穢お祓い　やはり若やぎ　甦る　ゾロに実りて　ぬばたまの　世の糧を得る　御宝　喜び返す

解説文　　(赤文字は、原文の現在訳です。)

ムカツ姫は、三十女たちを田の東にワカ姫の左右に佇ませられて、「稲虫払う　ワカの呪い」の和歌を歌わしておりましたが、この「ワカの呪い」の歌詞を注意深く読みますと、「稲の種」を蒔く前の「良い苗床づくり方法」を歌っておりました。古代にはすでに地中にいる稲虫の幼虫を駆除する方法が発見されていたようで、「土を耕すことで日光と云う自然の光や風雪が虫を駆除してくれる」と歌っておりました。

ワカの呪いの歌

種子は田根　ウムスギサカメ　マメスメラの　ゾロ葉も喰めそ　虫も皆死む

ワカの呪い歌の意味

「稲の種子は、田んぼに根を張り育ちます。だが、種を蒔く前の土には、地中に虫の卵や幼虫がいます。その幼虫などを除するため、土をウムスギサカメ(掘り上げた土を逆立てにして崩し)して、マメスメラ(平らにまぶす)にします。そのことで、耕された土壌は太陽光や風雪に晒されるため、ゾロ(稲)葉も喰めそ(食物を噛んで食べる)の稲虫も　皆死む」ことになります。このワカの呪いの歌を繰り返し歌い、その回数は三百六十歌ひにもなり、その歌声は紀志井の稲田をどよませば(響き渡せば)、稲田より稲虫が飛び去りて、西の海へと、ざらり(多数の稲虫の羽根が触合う音)音を残して、稲虫が去りました。

このようにワカの呪いの行事を行ったことで、穢(けがらわし)お祓い、やはり(やっぱり)若やぎ(若がえる)して、傷んだ稲を甦る(蘇生する)ことができたのです。秋には、ゾロ(陸稲)に実りてぬばたま(檜扇の種子)が沢山に実るように、稲の実が豊作になり、世の糧(世の生活を豊にするもの)を得ることができました。このように稲を蘇生させる「稲虫払う　ワカの呪い」の歌が「御宝」となり、「ワカの呪い」を歌にしたワカ姫は、紀志井国の民に喜ばれ、民の喜びを知ったムカツ姫も更に喜び返すと申されました。

二つの辞書の意味より、合成した吉田訳の語句

(1)ウムスギサカメ→掘り上げた土を逆立て(裏返す)にして崩す。(吉田訳)

①ウムス(ギ)→畑を耕すこと(大辞)

②サカメ→目を逆立てること。

(2)マメスメラ→平らにまぶすこと。(吉田訳)

①マメス→まぶすこと(大辞典)

②メラ→ども、たち、(ガキめら)

1アヤ(綾)22(1 行)～23(3 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
		キシキクニ	アヒノマヱミヤ	紀志井国	天日の前宮
		タマツミヤ	ツクレハヤスム	玉津宮	造れば休む
		アヒミヤオ	クニカケトナス	天日宮お	クニカケとなす
		ワカヒメノ	ココロオトトム	ワカヒメの	心お留む
		タマツミヤ	カレタルイネノ	タ玉津宮	枯れたる稲の
		ワカカエル	ワカノウタヨリ	若返る	ワカの歌より
		ワカノクニ		和歌の国	

語句の解説

・天日の前宮→ムカツ姫を祭る宮、玉津宮→(現)玉津島神社、祭神は稚日女尊(わかひるめのみこと)和歌山県和歌山市和歌浦中 3-4-26、

・造れば休む→ワカ姫は、新たに造られた宮で、長居しゆっくりされた、・天日宮→ワカヒトを祭る宮、

・クニカケ→国懸け。なお、「懸け」の類似後として、「橋懸け」がある。橋懸けとは、「浮橋の媒介する」ことから、国懸けとは、「国(中央と地方)を媒介する」ことになる、

・留める→滞在させておく。残しておく、・心お留む→ワカ姫は、心に玉津宮のことを留められた、

・玉津宮→天日の前宮に同じ。

【疑問】

クニカケの意味であるが、「国懸け」「国掛け」「国欠け」と考えかちのようですが、、現在語ではなく紐解くことができません。

【疑問に応える】

そのため、「国懸け」の「懸け」の類似語として、ホツマツタヱを検索しますと、1アヤ(綾)25に「橋懸けなくて」、また16アヤ(綾)4に「橋懸けなして」の二つを見つけることができます。

この二つの「橋懸け」より「橋」の意味を考えますと、ホツマツタヱでは、「浮橋」を意味するとの言葉が記述されております。「浮橋」を現在語に直しますと、仲人であり、「人と人との間に立って橋渡しをすること(辞書)」を意味します。また「懸け」は、「.掛ける・懸ける(辞書)」より、「言葉などによる働きかけをする(辞書)」の意味になるようです。

このように考えて来ますと、「橋懸け」は、「仲人が労を取る(あることをしてやる)」と訳文(吉田説)ができるようです。上記の考えを踏襲しますとクニカケ(国懸け)の意味は、「橋懸け」の意味を引用し「仲人が労を取る(あることをしてやる)」が、「国が労を取る(あることをしてやる)」になるようです。このように「国が労を取る」と考えますと、古代で云えば国造(地方の役人)の役目になります。

このことから、ホツマツタヱ原文の「天日宮お　クニカケとなす」の意味は、「アマテル神(天日)の宮を、国造(クニカケ)の宮と名を変えます(となす)」と解釈できるようです。

(注_6)天日の前宮、天日宮の変遷の基礎知識

天日の前宮は、ホツマの以後の垂仁天皇16年に、現在地の和歌山市秋月 365 に遷座したと伝えられております。また先に天日の前宮が造られていた和歌山市毛見郷の地には、垂仁天皇の御世にヤマト姫の手により、新たにアマテル神が元伊勢神宮として造られて、三年間に渡りアマテル神が鎮座されていたと云われます。そしてアマテル神が伊勢神宮に遷られた後は、元伊勢と云われ、今では「浜の宮神宮」が鎮座していることを地図で見ることができます。

このことがあって、天日宮の名の宮は今では、和歌山市には実在しないようです。現在、鎮座する宮は、和歌山市秋月 365 の地の日前宮の境内西方に「日前(ひのくま)神宮」、境内の東方に「国懸(くにかかす)神宮」が鎮座しております。なお、日前神宮の謂れは、日本書紀の第七段一書、また、国懸神宮の謂れは、大化二年(646)八月癸酉【14】の条に見ることができるようです。

宮の変遷

和歌山市	(元)	1アヤ(綾)22	1アヤ(綾)22	垂仁天皇16年	現在
毛見郷	天日宮	天日宮	天日宮→国懸宮	元伊勢宮(浜の宮)	浜の宮神宮
毛見郷		天日前宮	天日前宮		
秋月 365				天日前宮/国懸宮	日前神宮/国懸神宮
和歌浦中		玉津宮	玉津宮	玉津宮	玉津宮

原文の現在訳

紀志井国　天日の前宮　玉津宮　造れば休む　天日宮お　クニカケとなす　ワカヒメの　心お留む　タ玉津宮　枯れたる稲の　若返る　ワカの歌より　和歌の国

解説文　　（赤文字は、原文の現在訳です。）

紀志井国の稲虫騒動も一段落したのでアマテル神は、天日宮（アマテル神の宮）の前に、11アヤ（綾）3（1～2 行）より引用しますと、「母の日の前　ムカツヒメ姫」のために、和歌浦湾の浜沿いの和歌山市毛見郷に天日の前宮を造られました。

また、9アヤ（綾）48（1～3 行）より引用しますと、「なして和歌国　玉津島　歳徳神と　称えます」と記述しており、アマテル神は和歌山県和歌山市和歌浦中の玉津島に玉津宮を造られ、造れば休むと、ワカ姫は新たに造って頂いた玉津宮でゆっくりされるのでした。また天日宮は、ムカツ姫の天日の前宮が造られたこと、また天日宮はアマテル神の不在が多いことより、天日宮お　クニカケ（クニのミカツコ＜国造＞）の宮となすとされて、クニカケ（国造）の宮に名を変えられたのでした。

紀志井の浜、現在の和歌浦を満喫されいたワカ姫は、稲田の穂虫の大群の再発生がないかと心お留む（留意：辞書→スルある物事に心をとどめて気を配ること。）ことに費やされて、その後も玉津宮に長居されておりました。そのことを承知していた紀志井の国の民衆は、この紀志井国を「枯れたる稲の若返る　ワカの歌より　和歌の国」と称えました。（この時点では、未だ紀志井国→和歌の国には変更されてなく、次のワカ姫の回の歌には、「紀志井こそ」と詠まれていたことからもわかります。）

1アヤ（綾）23（3 行）～26（4 行）【本文】

ヲシテ	カナ文字	現在訳	
	タマツノヲシカ	玉津の勅使	
	アチヒコオ　ミレバコガルル	アチヒコお	見れば焦るる
	ワカヒメノ　ワカノウタヨミ	ワカ姫の	ワカの歌詠み
	ウタミソメ　オモイカネテゾ	歌見初め	思い兼ねてぞ
	ススムルオ　ツイトリミレバ	すすむるお	つい取り見れば
	キシイコソ　ツマオミキワニ	「紀志井こそ	妻お右際に
	コトノネノ　トコニワキミオ	琴の音の	床に吾君お
	マツゾコヰシキ	待つぞ恋しき」	
	オモエラク　ハシカケナクテ	思えらく	橋懸けなくて
	ムスブヤワ　コレカエサント	結ぶやわ	これ返さんと
	カエラネハ　コトノハナクテ	返らねば	言の葉なくて
	マチタマエ　ノチカエサント	待ち給え	後、返さん
	モチカエリ　タカマニイタリ	持ち帰り	高天に至り
	モロニトフ	諸に問ふ	

語句の解説

・勅使→天皇の意思を直接に伝えるために派遣される使い。勅旨（天子の意思）を伝える使者、
・アチヒコ→阿智彦→思兼命、・焦るる→焦がれる→いちずに、激しく恋い慕う、・言の葉→ことば、
・見初め→異性を一目見て好きになる。初めて見る、・思い兼ね→事を議ることを役目とする神の意、
・こそ→ある事柄を強める意を表す、・ミキワ→ミキ（右）・キワ（際）、・床→人の座する台・寝床、
・恋しき→強く心を引かれるさま、・思えらく→思っていることには。・橋懸け→仲人が労を取る、
・結ぶやわ→婚約する、いや、そうではない。結ぶばないだろう、・待ち給え→待って下さい、
・高天→政庁のあった所、伊雑宮

原文の現在訳

玉津の勅使　チヒコお　見れば焦るる　ワカ姫の　ワカの歌詠み　歌見初め　思い兼ねてぞ　すすむるお　つい取り見れば「紀志井こそ　妻お右際に　琴の音の　床に吾君お　待つぞ恋しき」思えらく　橋懸けなくて　結ぶやわ　これ返さんと　返らねば　言の葉なくて　待ち給え　後、返さん　持ち帰り　高天に至り　諸に問ふ

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

ワカ姫は、玉津の勅使（ワカ姫のために玉津宮を造営した時に、伊勢のアマテル神より玉津の宮に派遣された使者。）のアチヒコの容姿お、初めて見られれば　余りの凛々しさに、焦がれられる（焦がれる→いちずに、激しく恋い慕う。）る。その機会は伊勢より紀志井国に来られた、アチヒコの「迎えの歌え」でした。ワカ姫は、その「迎えの歌え」で和歌の歌を詠み、アチヒコに捧げられました。

和歌を受け取ったアチヒコは、ワカ姫の歌が、見初め（異性を一目見て好きになる。）の歌であったため、一瞬、ためらわれ、その歌を読んでいいものか否かと思い兼ねられて、さぞや迷われてしまわれた。それを見ていたワカ姫が、余りにもすすむるために、おもむろに、その歌をついつい手に取り、よく良く見れば、その歌はアチヒコへのワカ姫の恋文であった。

「紀志井に派遣された貴方こそ、私の良き夫（せ）になる人でしょう。どうか、貴方の妻に迎えて下さい。そして、私お貴方の右際に寄り添わせて下さい。貴方が伊勢に帰られる前に、玉津島の宮の琴の音の漂う高床にて、吾の君がお越しになるのお、待ちに待つて　さぞや　吾の君を恋しき気持ちになることでしょう。」

アチヒコが思えらく（考えること）には、浮橋（仲人）を懸けなくて（置かないで）結ぶ（婚約する）、やわ（いや、そうではない）。 アチヒコは、ワカ姫より受け取ったこれの和歌を返さんと、その場で歌を.黙読されたが、返らねばと思う気持ちとは裏腹に、歌の作られ方が飲み込めず、次に繋がる言の葉が出て来なくて、ワカ姫にお待ち給え（下さい）とご返事を差し上げられました。そして良く吟味した後に、返さん（ご返事する）とその歌を持ち帰りられ、カナサキの居る高天（伊雑宮）に至（帰）り諸神に問ふことをされました。

1アヤ(綾)26(4 行)～30(4 行)【本文】

ヲシテ	カナ文字		現在訳	
		カナザキイワク		カナザキ曰く
	コノウタハ	カエコトナラヌ	この歌は	返えことならぬ
	マハリウタ	ワレモミユキノ	回り歌	われも御幸の
	フネニアリ	カゼハゲシクテ	船にあり	風烈しくて
	ナミタツオ	ウチカエサジト	波立つお	打ち返えさじと
	マハリウタヨム		回り歌詠む	
	ナガキヨノ	トオノネフリノ	長き夜の	遠の眠りの
	ミナメサメ	ナミノリフネノ	皆目覚め	波乗り船の
	オトノヨキカナ		音のよきかな	
	トウタエバ	カゼヤミフネハ	と歌えば	風止み船は
	ココロヨク	アワニツクナリ	快く	阿波に着くなり
	ワカヒメノ	ウタモミヤビオ	ワカ姫の	歌も雅お
	カエサジト	モフセハキミノ	返さじと	申せば君の
	ミコトノリ	カナサキガフネ	勅り	カナサキが船
	ノリウケテ	メオトナルナリ	ノリ受けて	夫婦となるなり
	ヤスカワノ	シタテルヒメト	ヤスカワの	下照姫と
	アメハレテ		天晴れて	

語句の解説

・ならぬ→「ならない」、できない、・回り歌→回文と同じ、・御幸→アマカミ(天神)の行幸、
・烈しい→火、気性、雨が烈しい、・波立つ→波が立つ。波が起こる、
・打ち返す→打たれた仕返しに相手を打つ。引いた波がまた寄せる、・さじ→さんと、
・長き夜→秋の長い夜、・遠の→とおくの、遠方の、・眠り→ねむること。ねむり、
・阿波→四国の香川県、・雅→上品で優美なこと。また、そのさま。風雅。優雅、
・君→ワカヒトのこと、・勅り→天皇の命令。また，それを伝える文書、・ノリ→乗り、
・ノリ→法度、法も度も〈のり〉(法則，規則)の意で，おきて，さだめ，法を意味する言葉、
・なるなり→なられました。(吉田訳)、・ヤスカワ→野洲川、・下照姫→ワカ姫

原文の現在訳

カナザキ曰く　この歌は　返えことならぬ　回り歌　われも御幸の　船にあり　風烈しくて　波立つお　打ち返えさじと　回り歌詠む　長き夜の　遠の眠りの　皆目覚め　波乗り船の　音のよきかな　と歌えば　風止み船は　快く　阿波に着くなり　ワカ姫の　歌も雅お　返さじと　申せば君の　勅り　カナサキが船　ノリ受けて　夫婦となるなり　ヤスカワの　下照姫と　天晴れて

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

カナサキの翁が曰く（述べる）には、ワカ姫が歌った「紀志井こそ」から始まる恋文のこの歌は、返えことならぬ（返すことができない）歌です。その理由は、文頭より読んでも文末から読んでも　ワカ姫の恋心を表現した同じ語句の歌になっており　対語ができないのです。このため、このような手法の歌を回り歌と云うようです。これに対しアチヒコは、われ（アチヒコ）も、大御神（アマテル神）の御幸のお伴をして、阿波行きの船内にあり（ます。）　初秋の海は、風、波の勢が烈しくて、更に、沖から大波が押し寄せて、白波が立つております。その船内に居て、私はワカ姫から頂いた和歌への返し歌を、打ち返えさじ（さん）と回り歌を詠むでおります。

回り歌

長き夜の　遠の眠りの　皆目覚め　波乗り船の　音のよきかな

解説

「初秋の長き夜の玉津宮で聞いた琴の音が忘れられなくて、ついつい遠の眠りの夜（とおくのねむりの夜→吉田訳：眠れない夜）を過ごしてしまった。気付けば阿波の海の夜明けの光がまぶしくて、昇る日に照らされた御幸の船では、皆が目覚めておりました。その間にも、颯爽にも波間と朝日を掻き分けて走る大御神と吾（アチヒコ）が乗りし御船の上は、27アヤ（綾）27（3 行）～（4 行）を引用しますと、「孫のシガ　帆鰐（船）なす」の鰐（船）の帆が風を斬る音の、なんとも心地よきことかな」

（注_7）上の回り歌歌詞の基礎知識

当該の歌詞は、「室町時代の辞書である運歩色葉集（うんぽいろはしゅう）に記載されており、この歌の出典と記載されていた。」なお、この歌は日本書紀には未記載のようでした。

とアチヒコが優しく歌えば、それまで烈しく続いていた風も止み、大御神の御船は快く阿波の港に着くことになりました。「カナサキの翁は、ワカ姫、アチヒコの二人の回り歌を眺められた。カナサキの翁の感想は、ワカ姫の回り歌には、アチヒコへの恋心も、また、雅びも沢山詰まっており、これではワカ姫の救愛をワカヒコは、返さじ（返すことかできない）と思われました。そこで、カナサキの翁は二人のことをアマテル神に申せば、君（アマテル神）のワカ姫に対する勅り（天皇の命令）の言葉は次の通りでした。

そのお言葉を「アチヒコはワカ姫に返す歌を、27アヤ（綾）27（4 行）を引用しますと、「カナサキは　大亀（船）お造る」と記述しており、カナサキが大亀の船の上で詠んだと聞くが、どうだろうか。ワカ姫も大亀船に乗り合いし、アチヒコと二人で阿波の海を航海して見ては如何だろうか？」と申されました。その申し出をワカ姫は快く受けて、現在で云う所の婚前旅行に出かけられたのでした。それから暫くして、6アヤ（綾）35（3 行）～36（3 行）を引用しますと、「下照姫と　アチヒコと　伊勢お結ひて」と記述しており、夫婦となるなり（なられました。）。そしてアチヒコは、ヤスカワ（滋賀県野洲川）の川沿いに住いを設けられて、下照姫と天下晴れて夫婦になられ、6アヤ（綾）35（3 行）～36（3 行）を引用しますと、「諸共にヤスカワを治めて、御子のシツヒコ（後のタチカラオ）が儲けられた。」とのことです。

1アヤ(綾)30(4 行)～32(3 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
			ソノオシクサハ		そのオシクサは
		ヌバタマノ	ハナハホノホノ	ぬばたまの	花はほのぼの
		カラスバノ	アカキハヒノデ	鳥羽の	赤きは日の出
		ヒアフギノ	イタモテツクル	檜扇の	板もて作る
		アフギシテ	クニモリオサム	扇して	国守り治む
		ヲシヱクサ	カラスアフギハ	教ゑ種	烏扇は
		ソフハナリ	ヒアフキノハハ	十二葉なり	檜扇の葉は
		ミナハラフ		みな祓ふ	

語句の解説

・オシクサ→排草→虫追のため、檜扇の葉を束ねたもの、・ぬばたま→【射干玉】檜扇の種子。丸くて黒い。うばたま。むばたま、・ほのぼの→ほのかに明るいさま、

・鳥羽→烏の羽、「烏羽に書く」の形で、はっきりわからないこと、見分けがたいことをたとえていう、

・ヒアフギ→植：檜扇。別名は、烏扇と云う。花は六弁。黒いタネは、射干玉（ぬばたま＝丸くて黒い色の実）葉は、”扇”を広げたような姿。これが「檜扇（ひおうぎ）」の名前の由来。葉の並び方が、「檜扇」という扇子みたいなもの （ヒノキの薄い板をとじあわせた扇）に似ているとこから。、

・扇→扇いで涼をとるための道具、・国守り→紀志井国を守り治める→統治する。平定する、

・種→【種（くさ）】物事が生じるもとになるもの。たね。材料。原因。多く「ぐさ」と濁り、複合語として用いる。「語り—」「質—」、・烏扇（からすおうぎ）→ヒオウギ（檜扇）の別名。

・十二葉→檜扇の遺跡であるが、平城宮跡東方宮衙から木釘や紐で要を留めた十二握の檜扇が出土しており、（檜扇_ウィキペティアより）

原文の現在訳

そのオシクサは　ぬばたまの　花はほのぼの　鳥羽の　赤きは日の出　檜扇の　板もて作る　扇して　国守り治む　教ゑ種　烏扇は　十二葉なり　檜扇の葉は　みな祓ふ

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

先の1アヤ17～19にて、「ムカツ姫が紀志井の田の東に立って、オシクサ（排草）に　扇いだ」時のことを記述しておりましたが、「オシクサ（排草）と」の作られ方が説明されてなかった。そのため、当アヤ（綾）で補作説明されていた。

そもそも、稲虫を祓うためのそのオシクサ（排草）とは、檜扇と云う植物を扇状に並んだ葉をそのまま利用して、更に檜扇を何枚に重ねて作られたもののです。そして、種子の一個一個は、丸くて黒い色をしており、全体はブドウの房状で上向きになっています。この丸くて黒い色を昔よりぬばたまの実と云っ

ておりました。また花は、ほのぼの（ほのかに明るいさま）色をしております。また、この檜扇の種子と花を眺めていますと、種子は闇夜の鳥羽（はっきりわからないこと、見分けがたいことを例えて云う。）のようであり、花は一転して、地平線より昇る赤きは日の出のような艶やかな色をしております。

　このような檜扇よりオシクサ（排草）を作るですが、檜扇には二つの意味があるようです。（1）一つは、植物の花を咲かせる檜扇で、葉は”扇”を広げたような姿で、これが「檜扇（ひおうぎ）」の名前の由来になったようです。（2）二つ目は、植木としての檜扇です。檜扇（ヒアフギ）の　板もて作るの文章より、檜扇の素材の檜の薄い白板をとじ合わせた扇にします。このようにして檜扇で作られたオシクサ（排草）を持ってムカツ姫、ワカ姫は、「田の東に立ちて　稲虫を扇して見ますと、稲虫は全て去り、紀志井の国の稲田がお守りがされて、紀志井も治む（平定する）ことになったとのことです。そして、後に、9アヤ（綾）41（3 行）～42（4 行）にて、下照姫がクシキネ（初代モノヌシ）に教えた、「押草に　扇げは」の教ゑ種は、その後教材り、檜扇の形は「鳥扇の葉は、十二枚の葉を扇状に組立てるなり。」、そして、檜扇の葉を重ねたオシクサ（排草）の祓ふ風は、みな祓ふことで、延いては、「稲虫が去り　稲は若やぎる。」ことのできる古代の防虫道具の一つになっておりました。

1アヤ（綾）32（3 行）～36（4 行）【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
			アワノヨソヤゾ		アワの四十八ぞ
		マタミソフ	ミチナワスレソ	また三十二	道な忘れそ
		ハナキネハ	ヰナニツツルオ	ハナキネは	五七に綴るお
		アネニトフ	アネノコタエハ	ア姉に問ふ	姉の答えは
		アワノフシ	マタトフハラヒ	天地の節	また問ふ祓ひ
		ミソフナリ	イマミソヒトハ	三十二なり	今三十一とは
		コノヲシヱ	アメノメクリノ	この教ゑ	天の巡りの
		ミムソヰヱ	ヨツミツワケテ	三六十五重	四つ三つ分けて
		ミソヒナリ	ツキハオクレテ	三十一なり	月は遅れて
		ミソタラズ	マコトミソヒゾ	三十足らず	真と三十一ぞ
		シカレトモ	アトサキカカリ	しかれとも	後先かかり
		ミソフカモ	アルマウカガフ	三十二かも	ある間窺う
		オヱモノオ	ハラウハウタノ	汚穢物お	祓うは歌の
		コヱアマル	シキシマノヱニ	声余る	敷島のヱに
		ヒトウマレ	ミソヒカニカス	人産まれ	三十一日にかす
		メハミソフ	ウタノカズモテ	女は三十二	歌の数もて
		ワニコタフ	コレシキシマノ	ワに答ふ	これ敷島の
		ワカノミチカナ		和歌の道かな	

語句の解説

・アワの歌→ア～ワまでの 48 文字、・ハナキネ→ソサノオのイミナ、・姉→ワカ姫、ヒルコ姫、

・節→鈴が変る、年が変わる。8アヤ(綾)2(3 行)～8アヤ(綾)4(1 行)の引用文「今年二十四（鈴)の折、鈴お　二十五鈴に植え替えて　節に当たれば」、・天地の節→昼と夜が交互に繰り返し、地球が太陽の回りを一周し年が変わること、

・祓→神に祈ってけがれを清め、災厄を取り除くこと。罪をあがなうために出す物、天の巡り→三六十五重より一年間、・ヱ→×分かれた枝、重ねる→助数詞として使用、

・月は遅れて→29. 53日、三十足らず→二十九日、・後先→ある場所の前と後ろ、

・間→時間、時の隙間、・窺う→気づかれないように物陰やすきまから様子をみる。、

・汚穢→×おえもの→〇おわい、・おわい→けがれていること。よごれているもの。おあい、

・ヱ→ヱナ→胞衣、・【胞衣】→胎児が生み出されたのち，排出された胎盤・卵膜など、

・人産まれ→ワカヒトの生まれ28アヤ(綾)12(1 行～2 行)を引用すると、「産む宮は　ハラミ酒折男の胞衣お　北に納むれは」、

・三十一日、三十二→[宮参り]ふつう男児は生後 32 日，女児は 33 日目に氏神に参る。氏神の氏子となることは，正式に村の一員として認められることである。、

・かす→宮参り(吉田訳)、・ワ→地球、

・敷島→日本国の別称。「敷島の道」の略。世界大百科事典内の敷島の道の言及、【短歌】より〈短〉は，31 拍からなるために俗に〈三十一文字)〉とも称せられ，〈みじかうた〉と呼ばれることもあった。、・敷島の和歌の道→和歌の道。

原文の現在訳

アワの四十八ぞ　また三十二　道な忘れそ　ハナキネは　五七に綴るお　ア姉に問ふ　姉の答えは天地の節　また問ふ祓ひ　三十二なり　今三十一とは　この教ゑ　天の巡りの　三六十五重　四つ三つ分けて　三十一なり　月は遅れて　三十足らず　真と三十一ぞ　しかれとも　後先かかり　三十二かもある間窺う　汚穢物お　祓うは歌の　余る　敷島のヱに　人産まれ　三十一日にかす　女は三十二　歌の数もて　ワに答ふ　これ敷島の　和歌の道かな

解説文　　（赤文字は、原文の現在訳です。）

ワカ姫は、和歌の道を幼少のハナキネ(後のニニキネ)に教えられておりました。アワの歌は、「ア」が始まり～「ワ」で終わる四十八文字の歌ですぞ。また、アワの文字数の三十二文字を用いて、人の気持ちを表すこともできますが、その和歌の道に通じる和歌の「なにか」の本質をハナキネは忘れておりました。そのため、ハナキネは、自らアワの歌の五七調に綴る理由をお姉に問ふのでした。

その姉の答えは、「和歌の歌には、天地の節に源を求めることができるのです。そして、昼と夜が交互に繰り返し、地球が太陽の回りを一周し、年が変わることを天地の節と云いますが、この間の一年間を天の巡りと云うのです。」またハナキネが姉に問ふことには、「祓ひの和歌は、三十二の文字になりま

すが、今の和歌は、五七五　七七の三十一文字です。そうしますと、三十一とは、特別な意味があるでしょうか?

それに対し、姉の答えは「古の典に教え」があるのです。そして、この古の典の教ゑには、「天の巡りの日数が、三(百)六十五回もヱ(重)なり、この重なりを四つに分け、更に四つの一つ一つを三つに分けることがてきます。」 この結果、一と月の平均日数は、三十日と約半日(0. 42)になり、その約半日も、日が始まっておりまかので一日に数え、ひと月は三十一になる元になります。

だが、朔～満月～朔までの一朔望月は今も昔も二十九日と約半日(0. 53)のため、月は遅れて　三十足らずですぞ。だが、真とは、太陽の天の巡りにより、ひと月の日数は三十一日であるぞ。しかれとも三十一日の後先(ある場所の前と後ろ)かかりを考慮すると、三十二日になるかもしれない。このようにひと月の日数に一日の余裕があると、一瞬の間ができ、このことを物陰やすきまから様子を窺う、汚穢(けがれていること)物お、誤って身、心、魂に取り込んでしまう恐れがあるのです。そのため、汚穢物の侵入を防ぐための祓うは、和歌の歌に声を重ねて余る和歌の一節を詠むことで、更に、お祓いの効果が生じると、ワカ姫はハナキネに教えられたのでした。また、日本国の別称である敷島のヱナ(胞衣)に、人として産まれ、男は三十一日目にかす(現在の宮参り)し　女は三十二目に宮参りを行いました。この宮参りの行事は、現在でも残されることからわかると思います。

そして、人は和歌の三十一、三十二文字数をもとにして、生まれて来た喜びを和歌に詠み、ワ(地球)に答ふるのでした。そして、これこそが　敷島の和歌の道の真髄かな。

(1 アヤ(綾)　おわり)